

本論文は、古代ローマ社会において重要であると考えられてきた概念fides（「信義」「信用」「信頼性」「誠実」「忠誠」「約束」「誓約」等と訳される）が、文学作品の中でモチーフとしてどのように取り扱われ、どのような表現に与っているかを、英雄叙事詩、小叙事詩、喜劇それぞれのジャンルに属する作品に例を取って検討し、その文学的効果を検証することを通じて作品理解に寄与することを目的とする文学研究である。

全体は序論、第1～4章、結論、補遺、付録、参考文献一覧からなり、第1～2章は第I部、第3～4章は第II部としてまとめられる。序論は、これまでのfidesに関する研究がその概念、語義に重点を置き、文学的視点から捉えられてこなかったことを指摘し、その欠を補う試みであることを述べたうえで、文学作品でfidesがモチーフとして機能する場合を二つ挙げる。一つは、社会基盤としてのfidesがなんらかの理由で危機に瀕するような物語展開を見せる場合である。いま一つは、どのような文学ジャンルもそれぞれの常套、つまり、決まった約束事の上に成立していることに関わる。約束事に忠実であることはfidesに即していると思われる一方で、約束事の型ないし殻を破らないかぎり、創造性は生まれない。このジレンマそのものがfidesを介して表現されるとすれば、それはメタ文学的な創作と見なせる。第I部の2つの章が前者の場合として叙事詩2作品の例を扱い、第II部の2つの章が後者の場合として小叙事詩1編および喜劇3作品の例を扱うことが示される。加えて、補遺はこれまでのfides研究を紹介して、その概念規定を確認し、付録は第3章の議論の補いとして対象詩編の邦訳と構成の図表を添える。以下、各章の概要を記す。

第1章はシーリウス・イタリクス¹の歴史叙事詩『ポエニー戦争の歌』(*Punica*)から第6歌でのレーグルスの挿話を取り上げた。レーグルスは第1次ポエニー戦争中にカルターゴの捕虜となり、敵の捕虜将校たちとの交換要員として、交渉が成立しなければ再びカルターゴに戻るとの誓約のうえで、ローマに送られたが、元老院で交換をローマに不利として交渉拒否を訴えて認められると、誓約を守ってカルターゴに戻り、残忍な拷問死を受けたとされる。自分の命を犠牲にして祖国の利益を図り、敵国それも欺瞞で悪名高い相手との誓約を守ったレーグルスはfidesの模範的体現者としてキケローによって称揚された。ところが、シーリウス・イタリクスはレーグルスの妻マルキアを挿話に登場させ、夫が敵へのfidesを守って、夫婦が約束したfidesをなおざりにすると嘆かせ、彼をperfidus「fidesを裏切る者」と呼ばせる。fidesを介して、立場の違いとそれに応じた考え方の違い、その相違により一方では世に誇るべき栄光とも見える行為が他方で同時に暗い影ともなりうる皮肉が効果的に表現されていることを観察した。

第2章はウェルギリウスのローマ建国叙事詩『アエネーイス』(*Aeneis*)から第4歌での英雄アエネーアースとカルターゴの女王ディードーのあいだに介在するfides、第8歌でアエネーアースとのパラーティウムに植民したアルカディア人の王エウアンドルスのあいだに結ばれたfidesとこのfidesが関わる物語展開について考察した。

ディードーは亡き夫へのfidesを犠牲にして英雄とのあいだにfidesを媒介する庇護関係（これは正確には英雄の部下達との間に存在している）、主客関係、婚姻関係（とそれにとまなう国家の共同統治関係）を構築したと考えたが、運命は英雄にカルターゴに留まることを許さず、英雄との関係は瓦解する。ディードーは彼をperfidusと詰るが、彼女自身も亡き夫に対してのみならず、女王として国民に対してもfidesを貫けずに自死する。fidesの視点を通すことで女王の悲劇の様相がいつそう鮮明に示された。

アエネーアースはイタリアでの戦争に向けてエウアンドルス王と同盟を結び、老王の名代として息子パッラースを預かるが、パッラースは敵将トゥルヌスに討ち取られる。パッラースの死は英雄が王に対するfidesを果たせなかった結果として表現されていることを観察したうえで、そのことが作品中もっとも議論の多い結末場面での英雄のトゥルヌス殺害に深く関わることを論じた。

第3章はカトゥッルス『詩集』(*Carmina*)第64歌について、ヘレニズム的詩作の特色である知的遊戯の詩として、一方で英雄叙事詩の常套を読者に意識させるとともに先行作品の詩句や物語要素を取り込みながら、他方でそれらから期待されるものを裏切るような形式や構成、物語展開が認められ、そこにfidesのモチーフが巧みに織り込まれていることを指摘した。詩編はペーレウスとテティスの婚礼を全体の枠組としながら、内容の大半は織物に描かれたテーセウスとアリアドネーの物語からなる。詩の構成はテーセウスが怪物ミーノータウルスを退治してのち脱出した迷宮を模すかのように読者を惑わせる一方、アリアドネーの糸が脱出を可能にしたように、詩中に埋め込まれた「仕掛け」は、それらを辿ることで知的遊戯を楽しむことができ、fidesはその「糸」の一つとして機能している。アリアドネーは故国を捨ててまで助けたテーセウスに置き去りにされ、彼をperfidusと語り、神々のfidesを頼りに彼への懲罰を乞う。その結果、テーセウスはアリアドネーのことを忘れたように故国帰還の際の合図を忘れて父の死を招くという災いを蒙る一方、アリアドネーは絶望的状况からバックス神と結ばれて幸福を得る。頼りにできない人間のfidesに対して絶対的な神々のfidesという対比が見られる一方で、そもそもテーセウスにアリアドネーを忘れさせたのも神々の思し召しとすれば、この展開はfidesの実現というより、狡猾な企みのわざという正反対の印象を与える側面をもつことになり、そこに知的遊戯に即した諧謔が認められた。

第4章はプラウトゥスの喜劇3作品、『綱引き』(*Rudens*)、『ほら吹き兵士』(*Miles Gloriosus*)、『捕虜』(*Captivi*)を取り上げ、lenoとservus callidusという類型的登場人物に関わるfidesがありふれた劇展開の殻を破って新機軸を打ち出す道具立てとされていることを論じた。

lenoは女性の周旋を生業とし、儲けのために不正も平気で犯す憎まれ役と決まっており、約束の反故などで主要登場人物を翻弄したあと徹底的にやり込められるのが定型の筋である。『綱引き』では劇全体の提示をなすプロログスでfidesに反する欺瞞をなす悪人に神罰が下ることが述べられる一方、lenoは劇を通じてfides違反の悪人代表のように振舞い、終盤近くまですでにお決まりの破滅を予想させる劇展開を見せる。ところが、結末ではlenoと対峙した大旦那の「lenoのfidesを使うことは求めるな。それはできないから」という科白を機に様相が一変し、lenoは大旦那と好条件の取引を結んで幕となる。大旦那の科白は「lenoのfides (fides lenonia)」というオクシュモロンの滑稽さの他に、この劇ではlenoに期待される常套の展開が使えないことを暗示したメタ演劇的な効果をもつものとも解された。

servus callidusは機敏に策を講じて主人を助ける奴隷で、奴隷にとって主人の命令は絶対であるので、その点で揺るぎないfidesをもつと言えるが、仕える主人が複数になり、それら主人の求めるところが相反する状況では、献身している一人以外の主人へのfidesは見かけをつくろう芝居となり、一種の劇中劇としてメタ演劇的性格をもつとともに、それが芝居であると知っている観客には劇的皮肉の効果を上げる。『ほら吹き兵士』では、主人と思わぬ主人に仕える状況に置かれた奴隷がこの主人への策略の一環として自分のfidesを強調することで目的を達成している。一方、『捕虜』では、主人と奴隷が戦争捕虜となり、一緒に奴隷として売られて敵国人の新たな主人を仰ぐという特殊な状況のもとに、奴隷が主人と入れ替わる「芝居」の筋が絡み、奴隷から主人に対してのみならず、主人から奴隷、また、これら主従と新たな主人のあいだのfidesの錯綜が劇的効果に与っていることを論じた。